

〔学会〕 第1334回 千葉医学会例会
第34回 千葉泌尿器科同門会学術集会

日時：平成28年1月23日（土） 13：00～

場所：京葉銀行文化プラザ 6階「樺Ⅰ・樺Ⅱ」

1. 人工尿道括約筋植込術の当センターでの初期経験8例の検討

加賀勘家, 山西友典
(獨協医大・排泄機能センター)
布施美樹, 加賀麻祐子 (千大院)

前立腺術後の尿失禁に対し、人工尿道括約筋植込術(AUS)を8例(72.1±7.4歳)に施行した手術時間134.1±29.1分、術中出血量8.0±13.0mlであった。術後合併症はなかった。1日パッド枚数は術前6.9±1.9枚、術後0.1±0.3枚と有意に減少した($P=0.0001$)。1日尿失禁量は術前652.5±336.5ml、術後141.3±349.1mlと有意に改善した($P=0.0072$)。DOの有無と術後パッド枚数、術後尿失禁量について単変量解析を行ったが有意差は認めなかった($P=0.0510, 0.2319$)。AUSは前立腺全摘除術尿失禁に対して有効であった。

2. 緊急ドレナージを施行した上部尿路結石患者における結石治療の臨床検討

金坂学斗, 芳生旭辰, 藤本 歩
巢山貴仁, 荒木千裕, 増田 広
小島聡子, 納谷幸男
(帝京大ちば総合医療センター)

高齢化に伴い、現在様々な基礎疾患を有したPS不良な尿路結石症例が増加傾向である。今回、当院で上部尿路結石による尿路閉塞に対して、腎瘻造設もしくは尿管ステント留置を緊急に施行した62症例について、臨床的特徴やその後の治療を後ろ向きに検討した。高齢者やPS不良症例に対する結石治療の適応や治療方法について明確な基準が定まっておらず、今後検討する必要があると思われる。

3. 結石溶解を試みた神経難病感染腎結石の1例

香村衡一 (国立病院機構千葉東)
能重 歩, 伊藤喜美子, 磯瀬沙希里
小出瑞穂, 吉山容正, 新井公人
(同・神経内科)

74歳女性、パーキンソン病、気管切開、胃瘻管理患者。右腎尿管結石で腎盂炎を繰り返す。当初DJステント、腎瘻留置で対応。その後、TUL、PNL、結石溶解を試みて、カテーテルフリーにするまで対応に苦慮した症例を報告した。

4. 前立腺癌に対する放射線療法患者における内分泌療法中止後のTestosterone Recoveryの検討：内分泌療法中止1年後のTST値50ng/dLは、長期回復の有無を予測する

武井亮憲, 坂本信一, 杉山真康
馬場晴喜, 米田 慧, 布施美樹
川村幸治, 今本 敬, 市川智彦
(千大)

鈴木啓悦
(東邦大医療センター佐倉)
赤倉功一郎

(JCHO東京新宿メディカルセンター)

当院で前立腺癌に対して内分泌療法併用放射線治療を施行した82例を対象とし、内分泌治療終了後のTST値の推移と臨床因子を解析した。ホルモン治療中止1年後TST値が去勢域まで回復しない症例は、全例TST正常値までの回復を認めなかった。多変量解析では、ホルモン治療期間がTST回復速度を予測する有意な因子であった($P=0.0069$)。内分泌療法中止1年後における去勢域までの回復の有無が、長期TST回復の予測因子となる可能性が示唆された。

5. High Gleason score前立腺癌の治療成績: Gleason pattern 5の予後に与える影響

山田康隆 (旭中央)

当院にて前立腺生検を施行し前立腺癌と診断され、診断時に骨転移を認め、Maximum Androgen Blockade (MAB) 治療を開始した115例を対象とした。生検時のGleason pattern 5の有無により予後の検討を行った。観察期間の中央値は39.1ヶ月であった。Kaplan Meier Methodで、Gleason pattern 5を有する症例ではprostate cancer-specific survival ($P < 0.01$), Overall survival (OS) ($P = 0.01$) が有意に不良であった。Cox proportional hazard regression modelsによる多変量解析でGleason pattern 5, LDH, Albの3つの因子がOSを予測する因子であった。

6. 腹部手術歴のある症例に対するロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術の検討

梨井隼菱 (千葉県がんセンター)

限局性前立腺癌に対してRALPを施行した500例を対象に、腹部手術歴あり群140例と腹部手術歴なし群360例に分け周術期治療成績を後方視的に検討した。腹部手術の内容では虫垂切除が最も多かった。手術時間、出血量、病理学的病期、切除断端陽性率などの関し両群で差を認めず、既往あり群で有意に追加ポート作成が多かった。腹部手術既往のある症例に対しても安全にRALPを施行できると考えられた。

7. 去勢抵抗性前立腺癌に対するドセタキセル長期投与例の検討

小丸 淳 (千葉県がんセンター)

【目的】 去勢抵抗性前立腺癌に対する低用量ステロイド併用Docetaxel (DOC) 療法長期施行例について検討した。

【対象】 2007年9月から2014年10月までにDOC療法を開始し11コース以上施行した43例を長期投与群、10コース以下の症例のうち投与継続中の症例を除いた51例を短期投与群として比較検討した。

【結果】 長期投与例ではDOC療法が効果的であり比較的安全に施行できた。一方で長期投与例では時に致死的な有害事象を伴うこともあり、休薬や新規薬剤への早期切り替えを含めた治療戦略の検討が必要である。

8. 高齢者における筋層非浸潤癌に対するTUR-Bt症例の検討

杉山真康, 佐塚智和, 馬場晴喜
米田 慧, 武井亮憲, 柳澤 充
仲村和芳, 二瓶直樹, 市川智彦
(千大院)

【目的】 近年高齢者の膀胱癌症例も多く、当科でTUR-Btを施行した症例を若年者と高齢者で比較し、高齢者の非浸潤性膀胱癌につき検討する。

【対象と比較】 当科で近年施行したTUR-Bt症例につき後方視的に検討した。75歳以上を高齢者と定義した。原則High gradeのpT1症例は2ndTURを行い、ハイリスク腫瘍に対してはBCG膀胱内注治療を施行した。若年者と高齢者の臨床病理学的背景、非再発生存率、非浸潤生存率、全生存率(OS)、疾患特異的生存率(CSS)につき検討した。

【結果】 観察期間は中央値26ヶ月(1-77)である。若年者184例、高齢者146例であった。性別、再発歴、腫瘍数、形態、深達度、異型度、CISの有無については両群間で有意差は認めなかった。高齢者、若年者で2年非再発生存率は75%, 81%, 5年非浸潤生存率は97%, 94%, 5年OSは84%, 83%であり、5年CSSは96%, 93%であり、両群において有意差は認めなかった。

【考察】 高齢者は若年者と比較し腫瘍病理学的に予後不良因子が多いことはなく、浸潤や転移の頻度も高くはなかった。高齢者は併存疾患合併の頻度も高く、侵襲的な処置も容易ではない。上部尿路の精査と確実な初回TURでの診断が特に重要であり、症例に応じた治療計画も必要である。

9. 陰茎膿瘍に対して全除精術を施行した1例

金 尚志 (東京新宿メディカルセンター)

84歳男性、前立腺がん重粒子線治療後尿道狭窄に対し自己導尿指導していた。3週間前より悪寒、発熱、陰囊の発赤と腫脹を主訴に当院受診。感染コントロール目的に同日緊急入院。翌日、陰茎の腫脹部が一部自壊し膿の排出認めため造影CT撮影、陰茎内部にガス貯留認めた。陰茎膿瘍の診断にて全除精術、開腹膀胱瘻造設術施行した。

10. 陰茎癌に対する術後再発を来した症例

藤本 歩 (帝京大ちば総合医療センター)

34歳時、陰茎温存手術を行い、術後16年目PET-CTで集積を認める左鼠径リンパ節腫大を確認した。1か

月で急激に増大、疼痛が出現しSCCは67.9ng/mLに上昇した。リンパ節外浸潤を認め可及的に左鼠径リンパ節摘出を行い、TPF療法を2コース施行。リンパ節と16年前の陰茎腫瘍の双方からHPV18を検出し、晩期再発と考えた。SCCは1.4ng/mLまで低下したが再度上昇したため局所放射線療法を行い、現在リンパ節は縮小し新規再発・転移を認めず経過観察中である。

11. 済生会宇都宮病院での研修成果

新井隆之, 塚本 亮, 吉田真貴
関山和弥, 貝淵俊光, 戸邊豊絵
(済生会宇都宮)

千葉大学泌尿器科に入局後、1年の大学での後期研修を経て、2013年4月から現在に至る3年間、栃木県済生会宇都宮病院にて専門研修を行った。済生会宇都宮病院での研修内容とその成果について報告する。外来担当患者はのべ6,406名、入院担当患者は1,136名、総担当手術件数は1,025+ α 件であった。私生活を含め、非常に充実した専門研修を行うことができた。

12. 前立腺がんにおける低酸素応答性非コードRNAの次世代シーケンサーを用いた探索

滑川剛史 (埼玉医大ゲノム医学研究センター)

前立腺癌は低酸素の環境に対応することが知られており、これが予後不良因子であるとの報告がある。lncRNAは前立腺癌の増殖、浸潤に関わるとされている。我々は前立腺癌の低酸素応答に関与するlncRNAを探索した。前立腺癌細胞株を通常酸素下および低酸素下に培養し、採取したRNAを次世代シーケンサーで解析、候補lncRNAを見出した。今後は機能解析を進め、進展や転移との関連を明らかにする。

13. CRPCに対する次世代シーケンサーを用いた網羅的RNA発現解析

五島悠介 (千大)

【目的】最新のゲノム手法を用いてCRPC進展機序を解明すること目的とした。

【方法】CRPC臨床検体に対して、次世代シーケンサーで網羅的RNA発現解析を行なった。

【結果】新規にCRPC・miRNA発現プロファイルを作成した。miR-221/222/221*/222*はCRPCにおける癌抑制型miRNAであった。

【結論】癌抑制型miRNAを基点として、前立腺癌転移の分子メカニズムの解明が期待できる。

14. 当院におけるロボット支援腹腔鏡下前立腺摘除術500例の治療成績

深沢 賢, 竹下暢重, 梨井隼菱
篠崎哲男, 佐藤陽介, 小林将行
小丸 淳, 植田 健

(千葉県がんセンター・前立腺センター)
市川智彦 (千大院)

当センターで平成23年9月から平成27年1月までに行なった500例について検討した。周術期成績では全体の96.6%がパス通り退院でき、術中出血量は少なく同種血輸血は3例(0.6%)、術中開腹移行例は1例(0.2%)で、C-D分類GradeⅢ以上の有害事象は7例(1.4%)であった。治療成績ではPSA再発が術後2年で約10%の症例で認められ、pT3はpT2と比較して、断端陽性例は陰性例と比較して有意にPSA再発しやすかった。DVC処理を結紮なしに変更してから断端陽性率は有意に低下し、Safty pad達成率は6か月で82%、12か月で90%であった。

15. 同一術者によるHOLEPの治療成績並びにラーニングカーブの検討

松本精宏 (千葉市立青葉)

【対象】2011年4月より2014年5月までにHOLEPを施行された99例を対象とした。

【結果】平均核出重量は41.9g。平均核出時間は52.1分。平均手術時間は80.6分であった。症例を25例ずつABCD4群にわけラーニングカーブについて行った検討では核出効率はA群: 0.75g/min, B群: 0.93g/min, C群: 0.99g/min, D群: 1.33g/minであった。主な合併症は膀胱粘膜損傷: 1例, 尿道狭窄: 7例, clot-evacuation: 4例であった。

【結語】初期25例を過ぎ手術手技は安定してくるが、その後も手術手技の向上が得られていることが示された。